

「アブラム、エジプトに下る」

2020年11月27日

「エジプト人があなたを見れば『この女はあの男の妻だ』と言って、私を殺し、あなただけを生きしておくだろう。だからあなたは、自分のことを私の妹だと言ってほしいのだ。そうすれば、あなたのお陰で私は手厚くもてなされ、命は助かるだろう。」(創世記 12 章 12 節～13 節) ファラオはアブラムを呼びつけて言った。「あなたは何ということをしたのか。なぜ、彼女が妻であると告げなかったのか。なぜ、彼女を妹であると言ったのか。だからこそ私は妻として召し入れたのだ。さあ今すぐ、あなたの妻を連れて行きなさい。」(創世記 12 章 18 節～19 節)

アブラムは、生まれた地と親族、父の家を離れて、神が示す地に行きなさいという呼び出しを受けた。そして、あなたの名を大いなるものとし、あなたを大いなる国民とする、あなたを祝福の基とすると約束された。アブラムは、神の召し出しに応えることによって、真実が得られると信じ、妻サライと甥のロトを連れ、財産を携え、行き先を知らずに出発した。カナンに入り、シェケムで、「私はあなたの子孫にこの土地を与える」とのみ告げを受け、主のために祭壇を築いた。ベテルに移り、祭壇を築いて、主の名を呼んだ。見知らぬ地での不安と恐怖は大きく、安全と祝福を求めたのであろう。旅を続け、ネゲブに来た。

ネゲブで飢饉に襲われた。当時、他民族との争いと飢饉が最も恐ろしいことであった。アブラムは、ハランに戻るか、豊かな農業国エジプトに行くか、迷ったが、エジプトに下り、一族の安全を得ようと決断した。エジプトに近づいた時、アブラムは妻サライに言った。「あなたが美しい女だということを私はよく知っている。エジプト人があなたを見れば『この女はあの男の妻だ』と言って、私を殺し、あなただけを生きしておくだろう。だからあなたは、自分のことを私の妹だと言ってほしいのだ。そうすれば、あなたのお陰で私は手厚くもてなされ、命は助かるだろう。」この言葉は、他民族の中に入ることが、いかに危険であることを示している。サライは夫の申し出をどう思ったであろうか。美しいと認められ、嬉しかろうが、妻の身分を隠し、利用するのは不甲斐ないと思ったのではないか。危険を避けるためには仕方がないという思いで、アブラムの申し出を受け入れていく。エジプトに入ると、サライは美しい女と言われ、褒めそやされた。絶大な権力を持つファラオは多くの側室を持っていたが、異民族の大層美しいサライを宮廷に召し入れた。サライのお陰で、アブラムは手厚くもてなされ、羊、牛、ろば、らくだ、男女の奴隷など、多くの贈り物を得、恵まれた生活をする事ができた。ところが神は、アブラムではなく、ファラオと宮廷に恐ろしい災いを下された。「ファラオはアブラムを呼びつけて言った。『あなたは何ということをしたのか。なぜ、彼女が妻であると告げなかったのか。なぜ、彼女を妹であると言ったのか。だからこそ私は妻として召し入れたのだ。さあ今すぐ、あなたの妻を連れて行きなさい。』」ファラオは、アブラムの偽りのために災いが下されたことを知って、アブラムに問い質している。アブラムに責任があるはずであるが、ファラオの潔さを見上げたものである。創世記では、倫理的な良し悪しではなく、「あなたは祝福の基となる」という神の言葉が、全てに優先するのである。妻を妹と偽ったことがゲラルでもう一度あった。息子イサクも妻リベカを妹と言って難を逃れたことが記されている。そこでも偽りが裁かれることなく、恵みを得ている。アブラムは、ファラオから妻と多くの財産をもらい受け、エジプトから送り出されている。彼は神の言葉の真実を体験したであろう。